ネイチャー・テクノロジー研究会　◇ シンポジウム ◇

心豊かなライフスタイルと、新しいモノづくり

モノづくり日本会議は日刊工業新聞社、大日本印刷との共催で7月1日、東京・市ヶ谷で「ネイチャー・テクノロジー研究会シンポジウム」を開いた。テーマは「心豊かなライフスタイルと、新しいモノづくり」で、同研究会が初めて実施した「2030年の『心豊かなライフスタイル』」コンテストの表彰式も開催。審査委員を務めた東京都市大学教授の涌井雅之氏やクリエイティブ・ディレクターの小池一子氏、MASAMI DESIGN代表の高橋正実氏らが講演を行った。

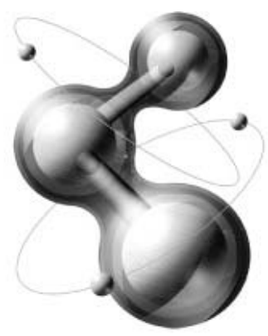
「2030年の『心豊かなライフスタイル』～未来のあたりまえを考える」

あいさつ――ネイチャー・テクノロジー研究会コーディネーター

東北大学大学院教授
石田 秀輝 氏

地球環境を取り巻く状況が厳しいことを知りつつ、ワクワクドキドキして笑顔で暮らしたい―。こんな思いから、私がコーディネーターを務めるネイチャー・テクノロジー研究会は「2030年の『心豊かなライフスタイル』コンテスト」を開催した。376点もの作品を審査して感動したのは、多くの方が自然や人との関わりを丁寧に描いてくださったことだ。

未来のライフスタイルとはいえ、とてつもないものではなくて、歴史上で日本人が当然に考え、当たり前にやってきたことなどがある。われわれが手放してしまった自然や人との関係を、テクノロジーを通してもっとすてきな形で取り戻せないか。いくつかの予兆は出始めており、新しいビジネスや教育、行政的措置などにつなげる方策をみなさんと考えていきたい。



モノづくり日本会議
―モノづくり推進会議NextStage―

■ コンテスト表彰式 ■

㊨コンテストで大賞を受賞した濱本庄太郎さん㊧優秀賞の野本秋音さん㊧・平田和久姫さん㊦コンテスト受賞者と審査委員ら

コンテスト表彰式では、大賞に輝いた「ハーフメードものづくり」の濱本庄太郎さん(35)、優秀賞の「家族が1つになることで」の野本秋音さん（8）、平田和久姫さん（13）のいとこコンビら9人が賞状と賞金目録を手にした。濱本さんは「デザイナーとして日頃考えてきたことをつづった。思考だけでなく行動に移していきたい」と強調。野本さんは「受賞を知った時はうれしくて40分間踊ってしまった」と語った。（協賛NEC、花王、積水インテグレーテッドリサーチ、大日本印刷、日本リファイン）

「行動に移したい」
大賞の濱本さん

自然と共生 豊かさの質深める

東京都市大学教授
涌井 雅之 氏

日本人は地球環境問題と東日本大震災による複合災害に直面し、今さえ便利で楽しければそれを大事にするのか、生命と自然、社会は永遠であるというサスティナビリティー（持続可能性）に賭けて新しい価値を創造するのかという分水嶺にさしかかっている。

私は自然に対して、力には力というのではなく「柳に風」という態度で臨むべきだと思う。人間がどのように英知を巡らそうと、数万年のオーダーで1枚の葉っぱにかなう技術革新は決してできないだろう。1枚の葉っぱはご承知のとおり光合成を果たし、太陽電池のような役割を持っているといっても良いからだ。

「柳に風」の態度で臨む

今後のモノづくりを考えた場合、自然の環境容量（許容される排出総量や浄化能力の限界量など）に目を向けて自然共生の文化を継承しながら、それを分母にして新たな科学技術をつくり出すことが必要。われわれのライフスタイルもそうした方向に変えていかざるを得ない。メーカーでは現在、大量生産から多品種少量のスタイルに変わって、立ち往生しているところが少なくない。

こうした状況から脱皮するには、自然を観察し、それに学ぶことは極めて大事。そもそも、伝統技術を生かした感動の演出とか、素材が本来持つ良さを引き出す技術とか感性価値に訴えかけることは日本人の得意技だと思う。物質的な豊かさを追い求め、利益でつながる社会ではなく、自然と共生して心の豊かさを深められる社会の構築に取り組んでいこう。

懐かしい未来 過去のすばらしい遺産 生かせ

クリエイティブ・ディレクター
小池 一子 氏

「懐かしい未来」という言葉は日本の歌にもなったが、そもそもはスウェーデンの学者ヘレナ・ノーバーグ・ホッジが1991年に著した本の日本語版タイトルだ。かつてのインド北部の人たちの暮らし方がすばらしいということで目を開かれたのに、どんどん環境が変化して近代化の波にもまれていく過程を観察する立場で書かれた。過去のすばらしい遺産を未来に生かすことが重要と考える。

私は無印良品の「くらしの良品研究所」で、何人かの仲間と衣食住全般について「感じの良い暮らしとは何か」を追究している。「繕う」というキーワードを掲げた時は、もったいないという意識が喚起され、サスティナブルな社会の人とモノの関係ということで生活者の反響が大きかった。

イタリアのデザイナーや学生たちとは「do it ジブンデ」という、既存の商品に手を加えて何かをつくり出す企画も手がけた。考えられないような日常の道具から照明器具をつくるといったアイデアが生まれた。

人間は多様な生物の中の一つの種であり、先祖から子孫に向かう「縦線」と、生まれてからの仲間や友達というネットワークである「横線」の交差点にいる。縦線でいえば先人から受け継ぐ生活や芸術、文化などの評価が大切だし、今を生きるあらゆる世代が環境問題などを共有できる横線のネットワークを考えていくべきだ。物事をとらえ点検する際、地球環境や生物多様性に調和しているかという尺度を持つことの重要性を議論したい。

ワクワクする未来へ デザインで社会問題解決

MASAMI DESIGN代表
高橋 正実 氏

私はプロダクトや空間、グラフィックなどのデザインの仕事を通じて「社会のすべてのことはどこかしらでつながっている」と実感している。そして、こうしたデザインは社会問題を解決する方策だと考えている。

数年前、経済産業省から印刷産業の未来像を描いてほしいと依頼された。そこで、保温性のあるインクができれば、不織布などへの印刷によって冬はたった1枚でとても暖かい洋服とか、夏はとても涼しい洋服とかをつくれるのではないかとのアイデアを披露した。

これは「洋服と体の間に新聞紙をくしゃくしゃにして入れると暖かい」などと幼い頃に母から教わった話から発想した。

私は10代の頃からモノづくり現場をワクワクしながら訪ね歩いてきた。日本のモノづくりのすごさを多くの人に知ってもらいたいと思って、その体験を『工場へ行こう!!』（美術出版社）という本にまとめた。今でこそテレビなどで職人さんや製造工程が紹介されるようになったが、当時工場はあまり楽しい場所とは思われていなかった。

私は昨年5月にオープンした東京スカイツリーのエレベーターのデザインを手がけた。スカイツリーというと高さや外観が注目されがちだが、防災拠点として地下には巨大な雨水タンクなども持つ。スカイツリーのある東京・墨田区は「雨水利用東京国際会議」が開かれたことでも知られる。江戸情緒の残る伝統的な街を広く発信することで、未来に向けた社会問題の解決にもつなげたいと思う。

パネルディスカッション　コンテスト審査を終えて

近畿大学特任教授
木村 文雄 氏

パネルディスカッションでは先に講演した小池氏、高橋氏に加え、近畿大学特任教授で前積水ハウス総合住宅研究所長の木村文雄氏、ファシリテーターで大日本印刷ソーシャルイノベーション研究所長の亀田和宏氏の計4人がライフスタイルコンテストの審査を振り返り議論した。（敬称略）

小池 審査するというのは審査されることでもあり、私たち自身の考え方とか問題意識が問われている。優秀賞の「家族が1つになることで」は人間性を取り戻すことの重要性を訴えている。家族の関係や人間関係をきっちり提案の中に入れており、感動している。

高橋 優秀賞の「未来×ハウス」は、祖父がワラが持つ断熱機能を教えてくれたとか、農業を通じた経験だとかを表現していた。惜しくも選に漏れた作品では、割れた焼き物を修理する「金継ぎ」でものを丁寧に使う提案、次代に継承するため「箱書き」を添えるという提案が印象的だった。

木村 大賞の「ハーフメイドものづくり」は、元企業人として耳が痛かった。メーカーは保証体制や収益面から、どうしても完成品を提供しがち。挑戦してもずっとできずにいたが、いよいよやらねばならないと感じた。日本の労働力が減少する中、ロボットがつくる完成品を供給し続けるのか、工程の半分ぐらいは生活者自らがつくる選択をするのか。家の場合、部材を軽量化すれば、人々は建築のプロセスをもっと楽しめる。

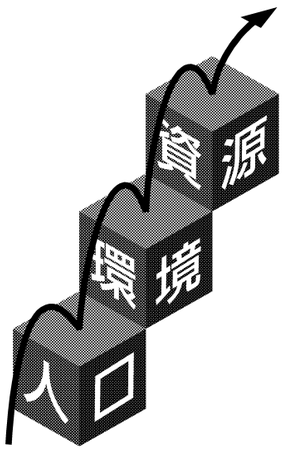
亀田 コンテストの企画段階ではライフスタイルではなく、ソリューションが多数を占めるのではという不安があった。ふたを開けてみると、自然観や家族観に根差した暮らし方が過半を占めた。3・11の影響が色濃く感じられた。コミュニティーのあり方や環境・エネルギー対策などを扱った作品も多かった。

小池 審査するというのは審査されることでもあり、私たち自身の考え方とか問題意識が問われている。優秀賞の「家族が1つになることで」は人間性を取り戻すことの重要性を訴えている。家族の関係や人間関係をきっちり提案の中に入れており、感動している。

自然観・家族観扱った作品多く

大日本印刷ソーシャルイノベーション研究所長
亀田 和宏 氏

MONODZUKURI



“超”モノづくり

モノづくり企業の英知を結集し、
将来にわたり発展できる盤石な産業基盤を築き上げる。
広域企業ネットワークが触媒となり、
人口・環境・資源の制約を乗り越え、
「“超”モノづくり」を推進する。

モノづくり日本会議
―モノづくり推進会議NextStage―
事務局　〒103-8548 東京都中央区日本橋小網町14-1（日刊工業新聞社内）　TEL 03-5644-7608　FAX 03-5644-7209　www.cho-monodzukuri.jp